

2021（令和3）年度 東京大学 入試問題 第4問（文系） 解答例

一 自分の描いた絵が拙劣であるのは自認していると記すことで、寝たきりの病状や漱石への友情を明るく伝えたいという心情。

*ここで、子規の病苦の悲痛さや漱石への思慕といった月並みでセンチメンタルな「人情」を恣意的な想像で「読み取り」、解答としてはならない。子規は病苦の我が身をも「写生」しうる人物であり、ここでは「俺の絵は下手じゃない、そう見えるのは病気のせいだ」と、負けず嫌いに強がっている自分の様を見せることで、諧謔味を示しているのである。

二 極めて簡単な図柄で、用いた色は三色のみ、花と蕾は三つ、葉は九枚で、周囲は白く表装は寒色と、全体に殺風景な印象であるから。

*これについても、前問と同様に、「子規は貧弱な画しか描けないほど弱って可哀そうだ」などという、陳腐な憐憫を弱弱しく吐露しているのではない。漱石もまた、写生を学び、非人情を語った作家である。「壁にかけて眺めて見ると」という、あくまでも視覚的、構図的な問題なのであり、作品に対する批評を友情で歪めたりはしていない。

三 才能の赴くままに写生の詩歌を作る子規が、写生画は拙く、時間と労力を要したと思うと、その矛盾がどうにも好ましいから。

*「～禁じ得ない」理由として、解答表現には「どうしても～してしまうから」というニュアンスを出したいところ。

四 万事に無欠な子規が、画は拙く、愚直な旨さを表した点は興味深い、より雄大な画を描けるまで生きてほしかったという心情。

*ここに至って、子規の死を惜しむという本音の心情部分が、ようやく姿を表している。センチメンタルな文章ではないからこそ、筆者の心情が伝わるのである。